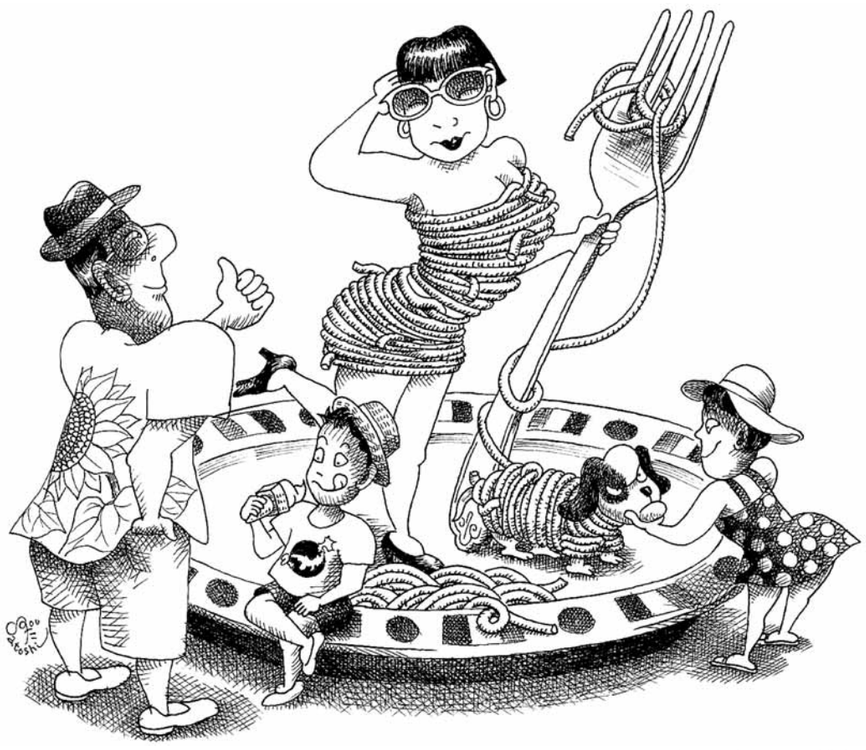
耕論

幸せなイタリア

オピニオン

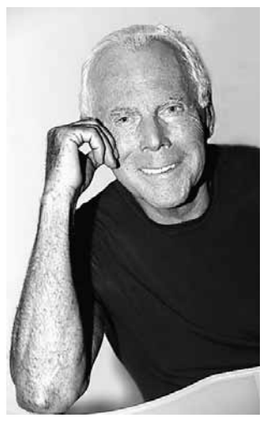
統一150周年を迎えたイタリア。国が財政危機でも、人々は明るく、人生を謳歌(おうか)しているように映る。幸せって何だろう。ファッション、ファミリー、フードの三つのFから考える。



イラスト・つのださとし

服を着るとは生きること

ジョルジオ・アルマーニさん ファッションデザイナー



34年、北イタリアのピアチェンツァ生まれ。大学で医学を学び、ファッションの世界へ。75年、既製服の会社を設立。世界46カ国に500店を持つ。
＝大原広和氏撮影

日本がイタリアに学ぶこと？

パスタぐらいで、すぐには思いつかない。ファッションに関してだって、最近の若い日本人はもうヨーロッパ風に服を完璧に着こなしていますしね。

あえて挙げれば、家庭の中での楽しみ方をよく知っていて、それをとても重視することでしょうか。米国などでは子供は若いうちに親元を離れるけれど、イタリアでは30歳から35歳くらいまで家にいる。スパゲティの作り方と同様に、麻のジャケットの着方や夜会服の選び方などを親から教わるのです。観劇やパーティー、外食など家族で行動する機会が多いから。

私は間違いなく、母の深い影響を受けています。「エレガンス（優雅さ）」の最初の記憶も母からのものでした。彼女が着ていたさりげないドレスや、こまごまとした化粧道具、服の作法を鮮明に覚えています。90歳になっても50歳過ぎにしか見えなかった。目立つことよりも、他人の記憶に残ることが真のエレガンス。「抑制の美」が大事なのだと学びました。

ファッションで大切なのは、人形のように自分を閉じこめないで済む服を選ぶこと。個性があって、快適さや機能性を重視して、組み合わせを様々に変えてみることが欠かせないのです。私はいつも濃紺のTシャツとシンプルなパンツのスタイルです。私自身が一番心地良くいられるから。引き締まった体形を保つ必要があるのですが、大げさにドレスアップするよりもずっと心が落ち着きます。

時には「本物の田舎」の一軒家で一切を忘れて、ありのままの素直な自分でいるようにしています。厳しい自然や都会と違う不便さも受け入れて、すべてを楽しむことが幸せなのです。

イタリアでは、ファッションとは生きるという行為そのものです。服を着るということは純粋な喜びであり、安らぎでもある。自分らしさや自信を得るため、そして気分を高めるためのひとつの手段なのです。インテリアや食器、車や建築などで優れたデザインがイタリアに多いのも、それが喜びであり、くつろぎに通じるからなのだと思います。

日本だって素晴らしいと思いますよ。私は日本の女性たちが着飾っている姿を見ると心からうれしくなる。規律に厳しく、静かで、かすかにほほ笑んで、お行儀よく座っているたたずまいが大好きです。そういう、文化の中に奥深く根付いた洗練された美意識に強く引かれます。

東日本大震災であれほどの惨事に遭遇しながら、禁欲的な態度と尊厳を失わない生き方に心を動かされました。7月のパリ・オートクチュールコレクションを日本に捧げたのは、偉大な国「日本」の文化と歴史に対する私の感嘆と尊敬の念を表したものなのです。

（聞き手　編集委員・高橋牧子）

家族の絆と自分を支えに

内田(うちだ)　洋子(ようこ)さん エッセイスト

59年生まれ。東京外語大卒業後、ミラノを拠点に執筆を続ける。著書に「ジーノの家」（日本エッセイスト・クラブ賞、講談社エッセイ賞）など。
＝高波淳撮影

イタリアと関わるようになって30年余り。暮らしてみると、郵便が届かないなんてしょっちゅう。ゴミが街中に積み重なることも度々です。ルールもあってなきがごとし、です。

日々降ってくる難題を乗り越える度、助けてくれる知人と経験が私の財産となってきました。彼らとの付き合いを通じて感じるのは、みんな人生の「帰結点」を自分に置き、生きるうえで家族を最も大切なよりどころとしているということです。

陽光にあふれた温暖な気候と食べ物に恵まれたイタリアは、キリストが生まれる前から人々を引きつけてやまない土地でした。様々な民族に侵略され、19世紀に国家として統一されたものの、20世紀前半はファシズムで破滅への道を歩みました。

歴史に翻弄(ほんろう)された人々は、国家なんて当てにならない、自分の才覚と力で生きるしかない、とDNAに刻みつけているといってもいいかもしれない。そして、生きていく大切なよりどころとなるのが、家族なのです。

「頼みは自分」は教育にもあらわれます。美術の授業で、目の前の絵画をただ「美しい」と言うだけでは駄目。どう美しいのか。どう感じたのか。自分で考え、自分の言葉で表現することを徹底して教えられます。

それは突き詰めると、苦しい時、つらい時にどう自分と向き合い、折り合いをつけるのかという「生きる力」を培うこと。誰だって苦労はある。思うようにやりくりすればいい。それがイタリア流なのだと思います。

日本では仕事や会社で行き詰まると、まるで人生が終わりのように思ってしまう。イタリアの普通の人々は仕事を生きる糧を得る手段と割り切って集中して片づけ、芝居を見たり家族と食事したり、自分と家族の時間を大切にします。仕事以外にも楽しいこと、生きがいはあるのだという「幅」を感じます。それは、柳のようにしなやかに生きることにもつながります。

彼らにだって悲しいこと、しんどいこと、どうにもならないこともある。人生には「光」もあれば「影」もある。人生の「影」を知ってほしいと書いたのが「ジーノの家」です。

彼らは、周りの人々を気遣う日本人の生き方、陰影や奥行きを大切にする美意識に憧れを抱いてきました。「頼みは自分」の国では到底到達しえないと。

その日本で、家々が津波に流され、家族が生き別れ、大勢の孤児が残されたことに、みんな大きな衝撃を受けたのです。私も友人らから300件も電話を受け、「どうこの悲しみを伝えれば……」と気遣われました。

形あるものはいつかは壊れ、なくなります。揺るぎないのは家族や人々の絆と、心の持ちようです。「3・11」以降、日本でもその思いはより一層強まっているのではないでしょうか。

（聞き手　杉井昭仁）

味の決め手は相手思う心

アドリアーナ・ヴァッローネさん イタリア家庭料理研究家

72年生まれ。97年から日本在住。現在、東京・渋谷でイタリア家庭料理教室を開いている。著書に「南イタリア　スローフードな食卓より」。
＝磯村写す

神さまがこう質問する。「あなたをライオンか羊に変えるつもりだ。どっちがいいか。ただし、ライオンなら1日だけの命。羊なら100日生きられる」。イタリア人はライオンを選ぶ。おいしいものを食べ、誇り高く生きたほうがいい――。

そんな話を祖父がしていました。「まずいものを食べて長生きしても人生に意味はない」というのです。そのような考えは、小さいころから時間をかけて育まれるのだと思います。

イタリアの親は、自分たちはふつうの肉でいいから子どもには値段が倍ほどのヒレ肉を、と考えます。日本では「子どもにいいものを食べさせるのはもったいない」と言いません？　イタリアでは逆。子どもを大切に思う気持ちからなのです。

実家はナポリ近くの小さな村にあります。子どものころ、日曜の朝はトマトソースの香りで目覚めていました。マンマ（お母さん）が、パスタ料理などの味の基本となるソースをつくっているのです。1週間分を2～3時間かけて。料理を待ちきれず、熱々のソースをパンにつけて食べていました。本当においしかった！

イタリア人の90％以上が「マンマの料理が世界で一番おいしい」と答えた、という調査結果を聞いたことがあります。私もそう思います。目隠しをして、10種類のトマトソースを食べ比べてもマンマのつくったものを当てる自信がありますよ。

同じレシピを使っても同じ味にはならないはず。愛情のかけ方が違うのでしょうね。マンマはたとえ疲れていても手抜きしませんでした。栄養のバランスも考えた、ヘルシーな料理です。家族が楽しみにしてくれるのが励みだったのでしょう。私たちもまた、「大事にされているなあ」と感じていました。

食事は家でするもの。外で食べるのは誕生日や大きなパーティーなど特別な日に限られます。外食が続くと、自分の「芯」がなくなっていく気がします。

友だちとの間でも一緒です。「あそこの店、おいしそうだから行こうよ」という話にはなりません。おたがいの家に招いて、手料理でもてなします。「私のマンマは先にジャガイモを入れてから豆を入れるの」「うちは順番が逆よ」。まず、食べ物をめぐる議論が始まります。そんな仲間がいれば、さらにおいしく感じるのです。

イタリア人が「おいしいもの」にこだわるというのは、ただ、味のことを言っているのではありません。相手を大事に思ってつくられた料理なのです。それは人と人を近づける。家族はもっともっと仲良くなれる。だから食事は喜びであり、なによりも大事なのです。

（聞き手　磯村健太郎）

リレーおぴにおん

女神からの自由研究 番外編・男の家庭科

山頂でアイロン、美を競う

アイロンの鉄人 松澤(まつざわ)　等(ひとし)さん（42）

エクストリームアイロニングを知ってますか。高山の頂上や岩壁など極度（エクストリーム）に過酷な環境で、服にアイロンをかける競技です。1990年代に英国で始まり、競技人口は世界で約400人。英国、ドイツ、日本が3強といわれます。世界大会もあり、かけ方の独創性、仕上がりの美しさ、タイムなどを競います。

僕は05年に競技団体エクストリームアイロニングジャパンを設立しました。現在のメンバーは14人で、仕事の合間に活動しています。富士山の山頂でもアイロンをかけたし、急流のカヌーの上や、サーフボードで波乗りしながらかけたこともあります。海中に潜ってのアイロンがけにも何度か挑戦しました。ここまでくるとアイロンをかける意味はなくなりますけど。

アイロンに目覚めたのは、19歳でオーストラリアに留学したのがきっかけです。最初にホームステイしたのが「自分のことは全部自分でやる」という方針の家庭で、大人も子どもも自分用のアイロンとアイロン台を持っていた。裏庭など屋外でアイロンをかけているのも驚きでした。すっかりアイロンがけにはまり、それからほぼ毎日アイロンがけをしていました。

エクストリームアイロニングとの出会いは、オーストラリアのニュース番組で、山頂でアイロンをかけている男の映像を見たことでした。そのときはばかばかしいと思っただけでしたが、日本に戻ってから、ふと思い出して、山に行ったときにまねしてみた。そうしたら、自分でもびっくりするぐらい気持ちがよかったんです。

エクストリームアイロニングの醍醐味(だいごみ)は、やっぱり山でアイロンをかけることにつきると思っています。電源は取れませんから、携帯コンロで直接アイロンを熱して使います。山で無心にアイロンをかけていると、自然と一体化していくような感覚を味わえます。

山まで行かなくても、一度、庭やベランダでアイロンがけをやってみたらどうですか。電源の延長コードを使えば無理なくできます。日の光を浴びながらアイロンをかけるのは、本当に気分がいい。掃除や食器洗いと違って、アイロンがけはプロセス自体を楽しめる貴重な家事なんです。

特に男性がもっとアイロンをかけるようになってほしい。欧米ではごく普通ですが、なぜかアジアにはその習慣がないように見えます。靴は熱心に手入れするのに、シャツは他人まかせというのは変じゃないですか。クリーニングに出すとぴっちりアイロンがかかってきますが、自分でやれば、好みで柔らかく仕上げることもできます。

朝、早起きして、ベランダでその日に着ていくシャツにアイロンをかけると、凜(りん)とした気分になれる。「心のシワ」まで伸ばせますよ。

聞き手　尾沢智史
撮影　松本敏之

23日から「物欲は世界を救う」をリレーします。

CM天気図

天野祐吉

三つのチ性

編集者には三つの「チ性」が必要だという話を、山口瞳さんに聞いたことがある。「知性」と「痴性」と「稚性」の三つだ。

CMの制作者にも、同じことがいえるだろう。知性だけじゃ足りない。バカみたいに物事に執着する痴性と、無邪気な好奇心や想像力を持った稚性がなければ、面白い表現は生まれない。

ま、本来の知性とは、その三つをバランスよく兼ね備えたものをいうのだが、CMでいちばん目立つのは、稚性が突出した、それも本来の稚性とは違うガキっぽいだけのCMだ。

そんななかで、サントリーのウーロン茶のようなCMをみるとほっとする。中国の女優の范冰冰(ファンビンビン)さんが、きれいな浜辺でカツサンドをむしゃむしゃ頬張っているCMには、大人の品のある目と子どものいたずらっぽい目が同居していて、見ていて自然に心がなごんでくる。

SMAPが衣装をとっかえひっかえ歌うソフトバンクのCMも悪くない。趣向は稚的でツクリは痴的だが、「二つ折りのスマートフォンが出た」というだけのニュースを、「たかがそれだけのことですけど」と自分で茶化(ちゃか)しているような知的な目ものぞいている。

それにしても、とあらためて思うのだが、稚性がやたらにハバをきかしているのは、CMの世界だけではないし、いまにはじまったことでもない。だいぶ前からこの国では、大人の文化は息も絶え絶えの状態だ。

テレビの国会中継なんかを見ていても、聞いていて恥ずかしくなってくるようなひどいことばが、毎日あきもせずに繰り返されている。あれは「チ性」どころか、この国の「恥性」を、広く天下に広告しているんじゃないかと思う。

（コラムニスト）